

---

# 魔王的な（後から決める）

糖分王

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王的な（後から決める）

### 【Nコード】

N3542Z

### 【作者名】

糖分王

### 【あらすじ】

高校1年になる女の子っぽい名前の男「轟 刹那」（とどろきせつな）が美少女にあったり、魔王になったり、勇者と共戦したりなど 波乱万丈の 面白あり、ツッコミあり、バトルあり？のドタバタファンタジーコメディー 作中に他作品と思しき表現や名詞などが多々出てきますが、それは全て幻覚です。フィクションです。どうか、温かい目で楽しんでください。

## 第1話 「プロローグ的な」

魔王。

その響きから、連想するのはきつと世界征服なんか考えちゃったり勇者が生意気だから、ダンジョンにモンスターを待機させて戦わせたり

魔界からモンスターの群れを連れてきて、人々を恐怖のどん底に陥れたりするといったおぞましい想像をするだろう。

だが、俺は違った。

いつも、勇者とそのユカイな仲間たちからボッコボコにリンチされ頼れる仲間が一人もいない一人ぼっちでとてもかわいそうな奴だと思っていた。

しかし、勘違いしないでいただきたい。

俺は別に、魔王が好きだというわけではない。

当然ながら、世界を救う勇者はメツチャかつこいいと思うし何らかの力を使って、魔法をつかいモンスターを倒したいとか世界をまたにかけて、魔王と死闘を繰り広げたいとか思ったりもした。

まあ、俺がまだそういう類のものを信じていたころの話だ。

もうそんなことが、ありえないことを理解しつつも自重しつつもアニメやマンガやラノベでそのすこぶる少年心を抑えている今日この頃だ。

俺の名は、轟とどろき 刹那せつな。

毎晩、アニメやマンガやラノベをみて過ごしている

いわゆる普通の、少し名前が女の子っぽい（禁句である）ということを除けば

大体そこらへんに転がっているちよいオタな高校1年生だ。

高校1年生と言ったが、正確には高校1年生に「なる」ところだ。

・・・このように、「普通の人間だ」的なことをいうやつに限って大抵普通ではない。

ある日突然戦争に巻き込まれ巨大ロボに乗り、ビーム何たらを振り回して戦ったり

七つ集めたら願いが叶うボールを巡って、強敵とすさまじい格闘を繰り広げたり

手が伸びて、海賊王になったりなんかしない

俺は、正真正銘の「普通」の人間だ。

さつきから、著作権ガン無視だがそれだけ器の大きい人間だということにしておく。

そんな俺が、3月に我が愛しの中学（いい思い出なんか一つもない）を卒業し

4月から私立聖魔璃亞学園しりつせいまりあがくえんに入学することになった。

そして、明日が入学式 文字通り青春の1ページだ。

さあ、これからどんな青春が俺を待ってるんだ！？ワクワクすっぞ！！

と期待に胸を膨らましながら眠りについた。

## 第1話 「プロローグ的な」(後書き)

初めての作品なのでいろいろと間違えたりするかもしれませんが、温かく見守ってください。感想とかアドバイスとかももらえるとうれしいです。

## 第2話 「オカンと僕と時々銀髪美少女」

翌朝。

ただいまの時刻 AM8:40・・・

このままでは入学式初日に遅刻というマンガでは面白いが本人にとっては、まったく面白さのカケラもないバットハプニングが起こってしまう。

この寝坊の理由は、じつに明確だ。

昨夜、ワクワクしすぎてなかなか眠れず・・・

いわゆる、遠足や修学旅行というイベントの前に訪れる例のアレだ。俺は、ベットから跳ね起きパジャマを脱ぎ捨て、制服に着替え、階段を駆け下り

母に、もう日本語ですらない文句やら罵倒を浴びせてパンを1枚かぶりつき家を飛び出た。

5

母からもらった学園までの地図を見ながら自転車を猛烈にこいだ。この母が描いた地図は、やたらと蛍光ペンで色分けされており寝起きの目ではとてもキツイ。これでわかりやすくしたつもりだろうか？有難迷惑である。

そんない로운な意味で残念な地図を頼りに学園を探す。

ようやく地図の「ここ」（目的地であろう）とデカデカと書いてあるところに到着したが・・・  
その時ようやく思いだした。

母は、重度の方向音痴だということ。なぜ、忘れていたのだろうか？

それは多分、強烈な眠気とバタバタしていたせいだろう。

目の前に建っているのは、最近 改装したばかりの小学校だった。

校門には、しりつせいまりあしょうがっこう私立聖真理阿小学校と書いてある。惜しい！！

「はあ」

ため息しか出てこない。

どうしたものか。これはもう完璧に大遅刻である。こうなったら、もうこのままバツクれてやろうか。いや待て、そんなことしたら俺の青春が終わる。

そうだ。事情を話してこの小学校の人に道を聞こう。職員室へ行き、事情話した。なんというか、ほかの先生の視線が痛い。

教頭らしき人物が、やさしく教えてくれた。

以外にもこの小学校から学園は近いらしい。

職員室を出るとき軽く会釈をして先を急いだ。

大体、なぜ俺が学園の場所を知らないのかというと

これには並々ならぬ、涙ぐましい理由がある。

もともと高校なんて卒業さえできれば何でもいいと考えていた俺はまあ、普通に友達と同じ高校を受験した。

特に、難しい試験はないのだが今年を受験者が多かつたらしく（少子化なのにな）

当然ながら頭の悪い俺は落ちた。

そして次に受験した高校では一応合格したが突然の放火事件により高校もろとも灰と化した。

3度目の正直ってことで猛勉強したが前日に流行りのインフルエンザにかかり受験さえできずに不合格。

もう世界に呪われているんじゃないだろうかと引きこもりがちになった俺に

母がこの私立聖魔璃亞学園しりつせいまりあがくえんの話をもちかけてきた。

つまり、母親のコネで高校に通えるのである。

まったく、母には頭が上がらない。（先ほど罵倒してきたばかりだが）

ていうか、アンタが場所知らないでどうすんだよ！  
この行き場のない怒りをペダルをこぐ足にそそぎこんだ。

学園は、俺の家からなら自転車で10分くらいで着くのだが  
寝坊と母の地図の見事なまでのコラボレーションにより20分くら  
いかかった。

「やっと着いた」

今度こそ校門には、私立聖魔璃亞学園しりつせいまりあがくえんと高らかに書いてあった。

校門には、きれいな桃色の桜が散っていて、外見はどこか神秘的で  
神々しく何よりデカイ。

学園というよりは教会に近い感じだ。

そして、大きな鐘が一番上のほうにある。

おゝゝゝ、なんかいい感じじゃねっ。

とか、歓喜に浸っていると自分が遅刻していることを思い出した。  
急がねば。

駐輪場に自転車を止めて、体育館に向かった。

当然、入学式にでるためだ。(無駄だろうが)

アスファルトに自分の靴音だけが響く・・・

体育館に向かうのだが自分の足音以外何も聞こえない・・・

やっぱり、もう終わったんだろっな。

アスファルトを抜けて体育館へと続く渡り廊下を完全諦めムードで  
気怠く重い足で歩いた・・・

しかしつ、俺は次の瞬間 目を見張った！

渡り廊下の最奥、体育館の入り口前に何やら人らしきものが横たわ  
っていたのである！

俺は、いつの間にかその人らしきものの方へ走っていた。

近づいているうちに、気づいたが倒れている人はどうやら 女の子  
のようだ。

もっと近づいてみると・・・っ!?



俺の眠気が一気に大気圏を突破し、月をも貫いてぶっ壊してしまう  
と思うくらいにぶっ飛んだ。

危うく、サイヤ人が大猿になれなくなるところだった・・・じゃな  
くて！

俺の目の前にいる女の子はものすんげえ可愛かった。

いわゆる、「美少女」だ。

雪のような白い肌

針金のように鋭く、ナイーブで透き通りそうな銀髪

気の強そうな眉毛と目

そして、一番俺の目についたツーサイドアップ（も、萌える）

・・・

はっ、どのくらい見とれていたんだろうか。

よく見たら、顔色が優れていない。

これは、いけない！！

早くこの子を保健室へ連れて行かなくては！！

しかし、どうやって？

担いでいくのか？

彼女いない歴15年の俺が？

女の子の目を5秒も見つめられないこの俺がか？

いや、無理無理無理無理！！

「うーん。」

ギクッ！

銀髪美少女がうなっている。

顔色が悪くなる一方だ。

・・・

ええい！！

男、刹那 目の前に倒れている女の子一人救えないで何が男だ！！

（今、女の子みたいな名前のくせにとか言った奴は誰だ！！）

俺は、その銀髪美少女を担いで保健室を探すことにした。



### 第3話 「リアル・・・怖い」

とても甘い香りがする・・・

それはまるで、バニラにココナッツの香りを混ぜた感じだ。

心なしか背中あたりに生暖かく柔らかい感触がある。

ああ〜ここは、天国だろうか・・・

俺の人生のなかでこんなに幸せを感じた瞬間があっただろうか？  
もうこのまま、天授をまっとうしてしまおうか。

・・・はっ！

俺は、意識を取り戻した。

危ない危ない、もう少して本当に逝ってしまうところだった。

三途の川の向こうで、バツチャンやジツチャンが

コタツを囲んで、ミカンをむさぼっていたのが見えた気がしたが  
気のせいだろう。

うん、気のせいだ。きっと俺の踊る心が見せた幻だ。

そして、現実に戻ってきてから蘇ってきた、この重量感。

明らかに、重力と俺の体重だけでなせる重さではない。

まあ、当然っちゃー当然だ。

なぜならば、背中に美少女を背負っているのだからである。

もちろん、この重さには体重もあるが精神的重みもある。

こんな美少女をこんなオタが背負っているという、罪悪感？

ちょっと待て、なんで罪悪感を感じにゃーならんのだ？

どちらかというと、優越感だろ。いや、そんなことはどうでもいい。  
大事なのは、この子を無事に保健室まで送り届ける体力が俺にある  
のかどうかだ。

さっきから言っているが、俺はオタだ。

リモコンより重いものを持つ生活をまず、していない。

よって、基礎筋力も基礎体力も皆無。

もちろん、小中学校での体育の成績は「オール1」

見たか！これが俺の人生の一番の称号だ！！（えっへん）

もう一度言うが、大事なことはただ一つ

この子を無事に保健室まで送り届ける体力が俺にあるのか否かだ。だから、早急に保健室をさがさなくてはならない。

しかし、ほんとにデカいなこの学園。

一階だけで伊達直人の心の広さくらいあるんじゃないだろうか。今の例えでわかるとおりそれだけ広く感じるということだ。

幅2メートルはある廊下を歩き続けていると

生徒玄関口らしき場所を発見した。

そのすぐ隣の部屋の前に「保健室」と書かれてあった。

俺は、残りの全身の筋肉を励ましなんとかたどり着いた。

ドアノブには、「ただいま留守にしています」という掛札があった。

この「」に非常に腹がたつかが、幸いにも鍵はかかっていなかった。たので入ることにした。

保健室の中は、独特の消毒液の匂いがする。

ベッドがあつたので、女の子を寝かせた。

その隣に置いてある丸椅子に俺は、へたり込んだ。

非常に疲れた。

俺の背中には、まだ温かみが残っている。

ふと、女の子の方に目をやった。

やっぱ、かわいいな。自分でも気づかないうちにニヤツいていた。自分に喝を入れる。

背負っていて思ったのだが、この子結構胸が大きい。

身長は、そんなに高くはないが

出るところは出ていて、引き締まるところはしっかり引き締まっている。

(セクハラだぞ、自重しろ。)  
しかも、甘くていい香りがする。  
俺の疲労しきった体が癒されていくようだ。  
いつの間にか、またニヤツいていた。  
何考えてんだ俺は！自重しろ腐れオタが！  
自分で自分を罵倒するほど悲しいことはない。

保健室の中は、静寂しきっている。  
どうしたものか。

このまま保健室にこの娘を置いていくわけにもいかない。  
かといって、この娘が起きるのを待っていたらいつになるか分からないし

起きた時の説明が面倒だ。

「うーん」

しばらく、考え込んだ・・・

仕方ない、保健の先生を呼びに行くとするか・・・

椅子から立ち上がり、保健室のドアノブに手をやった。

その時っ！

「きゃ~~~~~」

俺の背中の方から悲鳴が聞こえた。

何事か！と振り向いたら視界が真っ暗だった。

どうやら枕を投げつけられたらしい。

枕が顔からずり落ち、視界が明るくなり悲鳴が聞こえた先を見ると

そこには、さっきの銀髪美少女が赤面してこっちをにらんでいる。

.....

しばらくの沈黙が続いた。

この沈黙を破ったのは、彼女の方だった。

「こ、こ、この、変態痴漢外道鬼畜キモい屑虫豚野郎オタメガネ」

~~~~~！！」

啞然。

一瞬俺の体のすべての器官と世界が停止した。  
な、なんですと？

変態？鬼畜？オタメガ？

ちよつと待て、確かに俺はオタだがメガネではない。・・・っでは  
なく！

こんな罵倒の嵐を受けた人間がこの世に存在しえるのだろうか？

あんな、美少女の口からこんな言葉が飛び出してしまうのか？

リアル、恐ろしい・・・

「あ、あの〜」

一歩近寄った。すると

「来〜る〜な〜」

あるうことか、その美少女は近くにあった、本やら花瓶やらを投げ  
つけてきやがった！

「痛いっ、痛いから！！」

とりあえず、顔面直撃だけは避けた。

「おっ、落ち着け〜！！」

俺が、また一歩近づくと

「来るな、オタメガ〜」

今度は上履きを投げてきた。

間一髪のところ片方の上履きの顔面への直撃を避けた俺だったが、

「ヴっ！」

俺は、前かがみで倒れこんだ。

何が起きたかというと、俺の男にしかない男だけのシンボル（下半  
身のある一点）に

もう片方の上履きがジャストヒット！！

目の前が、真っ暗になる。

「お、おれは、たしかにオタだが、め、メガネじゃねえ・・・」  
バタッ

なんていう捨て台詞だ。

ザロキヤラの「覚えてるよ」「の方がまだ2倍くらいマシである。

#### 第4話 「保健室の白衣魔女」

目を覚ました。

視界には、青い天井が広がり独特の消毒液の匂いが漂う。

ここは、どこ？私は、誰？

最後のは、嘘だ。

俺は、轟とんま 刹那せつな 世界を魔王から奪還すべく立ち上がった勇者だ。

アレ、違ったかな？

まあ、大体そんな感じか。

ガシャンッ

俺の心の中にいる天使が悪魔を縛り上げ、プリズンに放り込んだ音がした。

今のクダリは、ほぼねつ造だ。

俺は、何してたんだっけ？

.....

「バサッ」

俺は、状態を勢いよく起こした。

思い出した。すべて思い出した。からつきし思い出した。

確か俺は、倒れている女の子を発見し保健室まで背負ってきたはいが

見事に返り討ちに会い床に突っ伏していたのだった。

まったく、あの女はなんだっただんだ？

命の恩人に向かって、何たる無礼をしてくれやがったんだ。

.....?

そつえば、あの女はどこ行った？

あたりを見回す。

彼女の姿はどこにもなく、ただ花瓶やら本やらが散らかっていた。

「はあ〜」

思わずため息が出てしまう。



あの女、結構顔色がよくなかったが大丈夫だろうか。  
まあいつか、恩をあだで返す奴はほおっておくとする。  
それよりも床に散らかっているブツ共を片づけなくては。  
俺は、せつせと片づけ始めた。

「ふう〜」

片づけ終わった。

なんだか、すっきりした気分だ。

.....

何か忘れているような・・・  
っ！！

そうだ、今日は入学式初日俺は遅刻をしているのだった。  
ただの遅刻ではない。大遅刻だ。  
時間を確認する。

AM10:30。

まだ、ロングホームルーム LHRには間に合うはずだ。

俺は急いで保健室の扉を開き、走り出そうとした・・・  
その時っ！

「ドンッ」「バサッ」「イッタ〜いです〜」

かわいい声でした。

どうやら人にいぶつかってしまったみたいだ。

とりあえず、俺は目を開き謝ろうとした。

「すみません、急いでたも・・・ん・・・で？」

俺は目を疑った。

目の前に、白衣をまとった小学5年生くらいの女の子が倒れている。  
押し倒してしまっただけなのかなので俺は慌てて立ち上がった。

「だ、大丈夫？」

小学生に手を差し伸べる。

「ありがと〜、大丈夫です〜」

こっちに大丈夫スマイルを向けてきた。  
か、かわいいじゃねえか。言っておくが俺にそういう趣味はない。  
ただ、純粹にだ。

目はおつとりしていて、腰のあたりまで伸びたきれいな黒髪ロング  
が目には焼き付いた。

ていうか、なぜ小学生がここに？

「あつ、言っておきますけど私 小学生じゃありませんですよ」  
と小学女子。

何っ、心が読まれている！？

俺が困惑しているのを察したのであろう、白衣のポケットから何やら取り出して俺に見せてきた。

「ねっ」

そう言っで見せてきたのは運転免許証と教員免許証だった。

「桂木 美歩？（かつらぎ みほ）」

俺が尋ねるようにツイートした。

「そっつ」

そう言っニコリと笑った。

何々？ほんとだ。教師だ。年齢は・・・24歳！？

マジでか？リアルにこんなことがあり得るのか？

若作りにも限度があるぞ！

だから、本人に確認をとってみる。

「マジですか？」

「マジです」

即答された。

「じゃあ、その白衣って」

「そう。保健の先生ですよ」

なるほど、真実はいつも一つなんだな。

「きみ、見ない顔だけど新入生？」

と問われたので

「は、はい。今日からお世話になる。轟 刹那です。」

と混乱気味の頭を整理しながら答えた。

「女の子みたいな名前だね」

「ほっとけ!」

「あははっ、やっぱり名前のこと言つと怒るんだね。愛由あゆが言つてた通りだ。」

愛由?どこか聞き覚えのある名前だ。

「まさか、愛由あゆって俺の母のことですか?」

「そだよ」

これまた即答。

轟とどろ愛由あゆ、俺の実の母親の名前だ。

ていうか、なんで母の名前が出てくるんだ?

「それはね、君のお母さんと私と学園長が親しい知り合いだからだよ」

つまり、母が学園長に俺の入学手続きを頼みこんでしてもらったと  
いうことだろう。

つーか、何で心が読まれてるんだ?

魔法使いか何かだろうか?

「まあ、そんなところかしら。」

.....

何かをあきらめた。

「ていうか、きみ、こんなところで何してるの?」

.....はっ!

そうだ!早く教室を探さない!

だけど、どこにあるのか見当もつかん。

俺は美歩みほ先生に、事情を話して教えてもらうことにした。  
話し終えると同時に先生は噴出した。

「あはははははっ、君最高だよ。世界に呪われてるんじゃない  
?」

まったく同感だ。

「うん、事情は分かった。よし、ここは先生が一肌脱いで案内

してあげよう。本当に脱ぐわけじゃないよ?」

「わかってますよ!!」

まったく、この人が言うとしゃレにならない。(いろんな意味で)

そして、俺は美歩先生をパーティーに加えると保健室を後にした。

(なんちゃって)

## 第5話 「アグレッシブと、うっとうしいは紙一重」

ここ、しりつせいまりあぐえん私立聖魔璃亞学園（略して魔璃学）は5階建てらしく

一階には保健室やカウンセリング室や職員室などがあり

二、三、四階には下から三年生、二年生、一年生といったふうに学年分けされており

クラスは、1（ファースト）から4（フォース）までである。

五階には、校長室と各特別室がある。

ということを俺の隣をテチテチと歩くCKT（チビツ子ティーチャ―）から聞かされた。

保健室を出て、左の方へ行くと二階へ上がる階段があった。

しかし、先生は階段ではなくその横にあるエレベーターに俺を乗せた。

学校のエレベーターに乗るなんて、小学校にある給食を運ぶ専用のエレベーターに

入っていたらそのまま閉じ込められ運ばれて以来だ。

さすがは、魔璃学。だてにデカいだけじゃない。

そんなことを考えながら、ふと今何階にいるか確認する。

階数表示の数字が「4」のところへ移る。がそのまま通り過ぎ「5」のところまで止まった。

どういうことだ？一年生の教室は、四階のはずだが・・・

エレベーターの扉が開く。

「こっち、こっち」

先生が手招きする。

「あ、あの〜」

俺が口を開こうとしたその時、先生はデカイ扉の前で立ち止まった。扉の幅、3メートルはあるだろう。

な、なんだこのデカイ扉は？開けたら、魔王なんか待ち伏せてる

んじゃないだろうな。

「ここが、学園長室だよ〜」  
と美歩<sup>みほ</sup>先生。

「なんで、学園長室？」

俺は、疑問をそのまま口にした。

「だって〜、まだアイサツしてないでしょ〜？」

なるほどな。確かに遅刻したし、入学式には出てないし・・・

挨拶よりも謝った方がよさそうだ。

先生は、コンコンツ とノックすると

「うんしょっ、うんしょつと。ん〜」

一生懸命ドアを押している。

なんとも可愛らしい光景だろうか。

まあ、確かにこの幼い体じゃこんなバカデカイ扉なんて開けられないだろう。

「俺が開けますよ。」

俺にも開けられるか分からないが、開けてみることにする。

ドアノブに手をやり、力を込める。

.....

ダメだ。開かねっ。

そして、先生にバトンタッチ。

黙々と、押し続けている先生。

俺は、あることに気づいた。なんで気づかなかったんだろう。正直、  
恥ずい。

「先生、あの〜、もしかして、それって引き戸じゃないんですか？」  
.....  
気まずい沈黙.....

「にはははっ、そんなこと君に言われるゼロコンマー一秒前にきづいて  
いたさ〜」

そんなことをいう先生の顔が真っ赤であることにはツッコまないで  
おいてやる。

ガチャッ 扉が開く。案外、扉は軽いようだ。  
学園長室の中は、扉のわりには小さく右サイドには本がギッシリ詰  
まった本棚。

左サイドには何か見たことがあるようなような絵画が飾られ  
部屋の中央最奥に学園長の豪華そうな作業机と後ろ向きの椅子が置  
いてあり

後ろの窓から日が差している。

「よく来たな。」

椅子の方から低い声がした。

ゴクリッ。

マジでか。マジで魔王が待ち伏せていたというのか？

「コー」「パー」

何やら聞き覚えのある鼻息をしている。

そして次の瞬間、椅子をくるりと回し振り返った！

.....

ツッコミどころがありすぎる。

まず、黒ずくめの衣装に黒いマスク.....

次に不気味な呼吸音.....

最後に右手に握ったFXライトセイバー.....

「どこの映画のスターでウォーズなシスの暗黒卿だよ!!」  
思わず思いつきりツッコんでしまった。

.....

またしても気まずい沈黙.....

「ぶぶぶっ、」

ん？

「ぶぶぶっ、ぶはははははあ〜」

えっ？

シスの暗黒卿が急に笑い出した。

「いや〜、ナイスツッコミだよ！少年！」

なぜか暗黒卿に親指を突き立てられた。

「悪い悪い、ちよつとカラかつてみただけだよ。合格だ。」  
合格？もうわけがわからん。

めちゃくちやにトレースしている俺の脳を落ち着かせる間にベ  
ダがマスクを脱いだ。

「ようこそ、我が私立聖魔璃亞学園へ。待っていたよ、轟とどろき 刹那せつな  
やん。」

マスクから出てきたのは、銀髪の美人だった。正確に言うと大人の  
魅力というか

キャリアーウーマンげな感じだ。（もちろん、俺が救ったであろう  
美少女ではない）

「ふちゃん」ではありません。ふくんですよ。駄ースベイ駄ー学  
園長」

俺は、ワザと嫌味っぽく言った。

「いやだな。そんなに怒らないでよ。冗談だつてば、轟少年！」  
ニヤリとした笑顔と突き立てた親指がこっちを向いている。

「ちなみに、私の名前は 星沢ほしざわ 椿つばなこの学園の学園長よ。ツッキー  
でいいわよ。」

なんとというアグレッシブな人だ。

「じゃあ、ツッキー学園長この度は入学させていただいて ありが  
とうございました。」

一応、お礼をした。できる息子だからな。

「いえいえ、わざわざ無理言って入学してくれてこちらこそありが  
とう。」

へっ？

「あの、母が無理言ったんじゃ。」

「何言っているの？こつちが無理言っただよ。」  
どういうことだ？

「なんで俺 なんかを？」

「・・・何も聞いていないのね・・・」



なにやら、意味深な言い方だな。

.....

少しの沈黙の後

「まっ、それは おいおい話すわ。」  
とあいまいにされた。

「あっ、それから少年く入学初日から遅刻とは感心しないな」

「す、すみません。これには深い理由が・・・」

俺は、若干年齢詐称ぎみな保健の先生に話した通り伝えた。  
すると、またもや噴出しやがった。

「ぶはははははっ、少年は根っからの魔王体質のようだね」  
魔王体質？なんだそれは？

「魔王体質ってなんですか？」

「まあ、それもおいおい話すよ。」  
またかよ。

「それはそうと、もう会ってるなら話が早いや。じゃあ、付いてきて。」

そういつて学園長室のドアへと向かう、ツッキー。

「あのく、どこに行くんですか？」

俺は、尋ねた。すると

「少年のクラスだよ」

そう言っつて、ウインクされた。

俺のクラスか。友達できるだろうか？

不安を胸に抱きながらも

新たにツッキーをパーティーに加えて学園長室を後にした。

第6話 「それでも僕は、やってない(マジで)」

学園長室を出て右に少し行くと、さっき上ってきたエレベーターがある。

そちらのほうへ足を向ける。

「どこに行くの？」

とツッキー、もとい学園長。

「えっ、一年生の教室は三階じゃないんですか？」

と勇者、もとい俺。

「うん、そうだけど少年はこっち」

そう言っつて、手招きする。

学園長室を出てから左の方へ歩き出した。

少し歩くと、各特別室が見えてきた。

部屋の名前は横文字の英語で書かれていて読めないの

どんな部屋なのかよくわからない。

そういえば、この学園はどんなことに力を入れている学校なのだろうか。

母からは、「世界が365度、変わるところ」としか聞いていない。

(実質5度)

「あの、この特別室って何をするんですか？」

疑問をそのままぶつける。

「まあ、焦るな少年。クラスにいたら話すよ。」

さっきからなんなんだ？もったいぶって。

そうこうしているうちに

「着いたよ。」

と言われたので顔を上げる。

五階の最奥、扉があった。

窓から光が差し込んでいるせいか神々しく光っているように見える。

その扉の真ん中には「？」という文字が描かれている。

「ここが、少年のクラス・クラス？（ゼロ）よ。」

クラス？？確かクラスは1（ファースト）から4（フォース）までじゃなかったのか？

もう、俺のサーバー（脳）じゃ整理しきれない。

「さあ、その扉を開いて 新世界の神になりたまえ！」

と駄ースベイ駄ー、もとい学園長。

「よし、ラピユタ王に俺はなる！・・・って、なんでやねーん！  
思わずノリツッコミをしてしまった。

「いいぞ、少年！そしてそのままラピユタとともにゴミのように海へ落ちて行きたまえ。」

それは、褒めているのか？それともけなしているのか？

「というのは冗談として、早くお開けなさい。きっとみんな歓迎してくれるわ。」

.....

本当に歓迎してくれるだろうか？

正直、俺の学校デビューにはいい思い出がない。

中学に入学するとき俺はこの町に引っ越してきた。

小学生の時は体が弱く、学校にはほとんど来ていなかった俺は当然友達などおらずそのまま卒業。

小学校を卒業する頃には俺の体は正常になり、無事中学へ入学。

しかし、入学式の日、朝起きると目ざまし時計が1時間遅れており、すでに遅刻。

慌てて自転車をこぎ始めるとチェーンが外れ、拳句の果てにはタイヤがパンク。

自転車を乗り捨て急いだが着いた頃には、入学式は終わっており教室で自己紹介が行われていた。

誰かの自己紹介の最中にドアを勢いよく開けてしまい、気まずい空気の席に着いた。

自己紹介ではスーパ―に噛みまくり、髪は寝癖でボサボサ、制服は乱れ  
チエーンを触っていたので体中サビの匂いがして、その日 一日中  
サビ臭を振りまいた。

しかも、担任は生活指導の先生らしく入学初日から服装を指導され  
目をつけられた。

それからの学校生活は、もう酷いというか呪われていた。

体育祭では骨折し、修学旅行では前日にオタフクかせ などなど e  
tc。

そんな涙ぐましいスクールライフでも、耐えている俺に神様は少し  
だけ友達をくれた。(類は友を呼ぶ)

少しでも友達がいるだけでどれほど自分の世界が彩いろどられるかを知っ  
た。

そう、今になつて思えば俺は運が悪い。

しかもただの運の悪さではない。魔王級だ。

さつき、学園長が言っていた「魔王体質」とはこのことだろう。(  
たぶん)

.....

急に不安になつてきた...

よし、開けるか。

俺は、ドアノブに手をやる。深呼吸を一回。

期待やら不安やらを抱え、ノックをし ドアをゆっくり開いた。

.....

俺はその日の光景を一生忘れないだろう。

ていつか、忘れられないだろう。

期待を胸に開けたはずのドアが

まるでパンドラの箱を開けたのではないだろうかと錯覚してしま  
そうになった。

教室の中は普通の高校より豪華で

部屋の真ん中には新品のようにきれいな木製の机が6つあり

椅子には肘置きがあり、15度くらい傾けられそんな背もたれがあ  
る。

黒板はホワイトボードで、照明はシャンデリア・

そんなことはいいとして、俺が最も気がかりなのは

真ん中の椅子に座っている5人がこつちを向いているが顔が見えな  
いということ。

正確に言う顔に見覚えのある覆面マスクをしている。

みんなスカートを履いているので、かろうじて女の子であると分か  
った。

白い布の上には、見覚えのあるマークがある。

手の甲をこちらに向け人差し指で天を指さしており、手の甲には目  
が描かれている。

その手の甲の背景には、それまた大きな目が描かれていた。

そしてそのマークの上には1から5までの数字がふつてある。

.....

頭が痛くなってきた。

友達が欲しいとは思っていたが、まさか「ともだち」が来るとは思  
わなかった。

俺は「よげんの書」を書いた覚えはないのだがな。

何だこの学園は？マスクネタが流行っているのか？

.....

どうしよう・・・ツッコむべきだろうか？

ツッコんだら負けな気がする。

だが、ツッコまなければこのまま世界にウイルスをまき散らして世界を滅亡させるかもしれないのでツッコむことにしよう。

「どこの20世紀げな少年のともだちだよー」

若干、棒読みげにツッコんだ。

「バシッ」「痛っ」

学園長からチヨップを食らった。

「そんなツッコミじゃ、蚊も殺せないぞ！」

と学園長。

「ツッコミ程度で蚊が殺せたら、すでにこの国の蚊は全滅してますよ！」

まあ、お笑いブームだからな。

「それだ！ナイスツッコミ！　そういうツッコミが欲しくてわざわざこのマスク作って被ってもらったのに、このままじゃ作り損だったよ。」

「やっぱ、アンタが仕組んでいたのかよ！」

俺は頭を抱える。ダメだこの人。

「そんなことはいいとして、みんなもう脱いでいいわよ」

脱ぐとは、もちろんマスクのことだ。

覆面マスク1号がさっそくマスクを脱いだ。

「もー、お母さんなんでこんなマスク被らせたわけ？息がしずらくてたまらなかつたわよ」

・・・っ！

俺は目を見開いた。

マスクを脱いだ女の子には見覚えがあった。

ていつかさつき見たばかりだ。

雪のような白い肌

針金のように鋭く、ナイーブで透き通りそうな銀髪

気の強そうな眉毛と目

そして、ツーサイドアップ。

……そう。

保健室で俺の大事なシンボルに上履きを投げつけてきた銀髪美少女だ。

「あつ。」

目があった。

「な、な、なんで変態オタメガがここに？」

彼女は目を見開いて、つぶやいた。

「そりゃあ、こっちのセリフだ。後、俺は変態でもないしメガネでもない。」

さっきは、捨て台詞で言ったただけだったのでハッキリ言ってやった。

「はあ？何言ってるの？保健室で私を襲おうとしていたじゃない。

それを変態と言わずして何ていうの？」

な、なんだと！？

「ま、まさか、少年がそんなことをする人間だったとは！？」

学園長がワザとらしいリアクションをとりやがった。

「アンタには、さっき話したじゃないですか！てか、誤解を招くい方してんじゃないよ！体育館前で倒れていたお前を誰が保健室まで運んでやったと思ってるんだ！？」

俺は少し荒々しい口調で言った。

「だから、保健室に運んで私を襲おうとしてたじゃない。保健室の鍵を閉めようとしてたし。」

と彼女の主張。

俺は、あの時のことを思い返した。

確か俺は、保健の先生を呼びに行こうと扉に手をやったところで彼女に返り討ちにあった。

……っ！そうか！

彼女の寝ていたベットからの角度だとちょうど鍵を掛けているように見えたのか。

「違う！俺は保健の先生を呼びに行こうとしていただけだ。」

「どうかしら、言い訳にしか聞こえないわ」

こ、このアマ！・・・どうも信じてくれそうもない。

ああ・・・真実は何て無力なんだ。

俺がどう説得するか考えていると学園長が

「まあ、落ち着きなさい 亜美<sup>あみ</sup>。少年はそんなことする子じゃないわ。なんてったってまだ女の子の手も握ったこともないチキン野郎なんだから。そんな子が女の子を襲えるはずがないでしょ？」

「・・・それもそうね。女の子の手も握ったこともないヘタレが襲えるはずないか。」

グサツ。2度も、2度も言いやがったよ！母親にも言われたことないのに！！

俺のハートがズタズタにされた。もうHPが赤くなっているだろう。

「そうだよ、そうですよ。俺は未だに女の子の手も握ったことのないヘタレでチキン野郎ですよ！ごめんなさいね！！」

履き捨ててやった。

てか、なんでそんなことわかるんだ？

「それは、君がヘタチキオーラをかもし出しているからだよ」  
とかわいい美歩先生。また心を読みやがったな。

っーか、ヘタチキオーラって何だ？（ヘタレとチキンの合わせ言葉であろう。）

・・・

「その、い、一応感謝しといてあげるわ。それと勘違いしちゃって  
たみたいでごめんなさい。」

素直に感謝されると少し照れてしまう。

「い、いや、分かってくれたならそれでいいよ。こっちこそ  
いるおいしい思いさせてもらったし。」

「おいしい思いつて何よ。」



「いや、妄言だ。気にするな。」

彼女はジト目で「こっちを見てくるのでとりあえず目をそらして知らんぷりをした。」

なんとか彼女の誤解も解けたようで、まあ良しとする。

## 第7話 「愉快な仲間たち」

「というわけで!」

学園長が仕切り直すかのように、ホワイトボードを叩いた。

「さあ、皆の衆自己紹介をしたまえよ!」

唐突な切り返しだ。

「あの、こういうのって担任から先にするもんじゃないですか?」

俺が冷静に聞き返した。

「そうね。じゃあ・・・私は 星沢 椿、これからよろしくね。」  
「・・・?」

「あの学園長。俺の話聞いてました? 学園長の紹介じゃなくて、担任の紹介をしてもらいたいですけど。」

「ん? 少年も私の話聞いてた? これからよろしくって言ったでしょう。」

ま、まさか!

「学園長が担任なんですか!」

「そゆこと。」

はあ。学園長が担任っていると大丈夫なんだろうか。

ていうか、俺のスクールライフが危機なのでは?

「そして、副担任が桂木先生」

そう言っつて、桂木先生を指さした。

「はい、保健の先生で副担任の 桂木 美歩です」

とこれまた可愛く自己紹介をした年齢詐称先生。

なるほど、だから学園長室に案内してくれたわけか。

「それじゃあ、次は覆面マスク1号こと 亜美 自己紹介して。好きなものとか言っつていいわよ。」

と言われると銀髪美少女は身だしなみを確認してから口を開いた。

「私は 星沢 亜美よ。好きなものは特にないわ。これからよろしく。」

と言って軽く会釈をした。

・・・？

「あれ？確か学園長も星沢でしたよね？」  
と俺。

「そう、亜美は私の娘よ。」

なるほど、髪の毛の色 一緒ですもんね。しかもさっき「お母さん」とか言っていた気がする。

俺は一つの疑問に行き着く。

「学園長若いですよ。一体、何歳なんですか？」

「あら、おだてても何も出ないわよ。女性に年齢を聞くななんてデリカシーがないぞ、少年」  
とウインクされた。

本当に何も出なかった。

「何、娘の目の前で母親 口説いてんのよ 変態。」  
と銀美女こと星沢さん。

「な、変態じゃない。単なる好奇心で聞いたただけだ。」  
と俺は反論した。

「あら、うれしい。私に興味があるんですって。」  
と学園長。あゝ、めんどくせ〜。

「もういいです。次行きましょう。次」  
と俺が言う

覆面マスク2号がマスクをとって顔を表した。

健康的な小麦色の肌。

髪は赤く、長い後ろ髪は少し長めの黒いリボンでくくられたポニーテール。

しっかりと引き締まった脚。見るからに体育系。顔は凜としている。

「あたしは、駿河すまが 茜あかね好きなものは肉だ。よろしくー！」

と元気のいい挨拶をしてきた。

「好きなもの肉って、どこのゴム人間だよ。」  
「ヤベっ、思わず口に出してツッコんじゃった。」

「ゴム人間？失礼な！あたしは、悪魔の実を食べるなら絶対メラメラの実だ。」

「な、なんで？」

「そんなの肉があったら、その場で焼けるからに決まってるじゃないか！」

なぜか誇らしげだ。

なるほど、上手に焼けましたってか。

「そうだね。それは画期的だね」

俺は適当に言ってみた。

「そうだろう、そうだろう。あたしは天才だからな。」  
「といってニツと笑ってくれた。」

まあ、笑顔は天才的だな。

そんなことを思っているとスネを星沢さんに蹴られた。

「何ニヤけてるのよ。キモいわよ。」

「うるへー」

俺は顔を引き締め直した。

「じゃあ、次 覆面マスク3号と4号」  
と学園長が言うと

3号と4号が同じタイミングでマスクを脱いだ。

そこに現れたのは小柄な2人の少女だった。

1人は、金髪で髪を右側を白い球付きのゴムで結んでいる  
いわゆるサイドテールっていうやつだ。  
さらに、頭の上には 白いウサ耳がのっている。  
目は優しく、まるで天使のようだ。

もう1人も大体一緒だが、違うところと言えば  
髪の左側を黒い球付きのゴムで結んでいることと  
頭ののっているのがウサ耳ではなく、黒いネコ耳というところだ。  
そして、右目に眼帯をしている。  
さっきのウサ耳少女とは対照的に  
目は少し吊り目で 小悪魔系といったところだろうか。

「わ、わたちは、ひべのえるるでしゅ。よ、よろちゅくおねがいし  
ましゅ。」

とウサ耳少女。

何て言っていたのか理解しがたい。

「落ち着いて。深呼吸してもう1回やろうね。」

と学園長が言うと、ウサ耳少女は深呼吸を1回してまた口を開いた。

「す、すみません。私、緊張しちゃって。えへへ」

そう言って自分の頭をポンと叩いた。うん、きゃわいい！

「私は 姫乃 恵流ひめの えるです。よ、よろしくおねがいしましゅ。ち、ち  
なみに私が悪魔の実を食べるなら、ニキュニキュの実です。」

好きなものはずが、いつの間にか食べたい悪魔の実になっている。  
しかも、これまたマニアックなのが来た。

ニキュニキュの実とは、手のひらに現れた肉球で触れたものを弾き  
飛ばしたりする能力を得ることのできる実のことだ。

「なんで、ニキュニキュなの？」

俺がそう聞くと ウサ耳姫は目を輝かせて

「だって、だって、いつでもどこでも肉球触りたい放題じゃないで  
すか！」

・・・話が見えない。

「ど、どゆこと？」

とぼけた声で聞き返す。すると

「恵流は・・・肉球が・・・大好き・・・なの。」

ともう1人のネコ耳少女が答えた。

「そうなんですよ。私、肉球が大大大大好きなんです！ていうか愛してます。肉球の香ばしい香りでご飯3杯いけますね。」  
ウサ耳姫、カミングアウト！

「そ、そうなんだ」

と俺。ニキュニキュをそんな感じで利用するのは君くらいだよ。  
俺はネコ耳少女の方を見る。

「私は・・・姫乃ひめの 依夢えむ・・・よろしく。悪魔の実なら・・・カゲカゲの実・・・ヨミヨミの実・・・ホロホロの実・・・どれにしよう？」

ネコ耳娘は、そう言って首をかしげる。  
というかその悪魔の実のチョイスだけでいろいろと、この子の根暗っぷりがわかってしまう。

「迷うな・・・どうしよう・・・」  
本気で悩んでいるらしい。

・・・？

ていうか さつき姫乃って言った？

・・・

「も、もしかして君たち姉妹？」

俺が聞くと

「そうです。」

「そう。」

2人同時に答えた。

「しかも、私たち双子なんですよ。」

そう言つて、ウサ耳姫がニツコリ笑う。

そういえば、髪型も一緒だし顔だちも似ている。

こんな可愛い双子がリアルにいるとは思わなんだ。

双子なんて幽体離脱する奴ら くらいしか思いつかない。

「じゃあ、次は覆面マスク5号 試してみよう！」  
と学園長が元気よく言った。

「バサッ」

5号は勢いよくマスクをとった！

.....

はあ

ため息を1回した。

「もう、マスクネタはいいんだよ！なんでマスクの下にマスク！？

キン肉マンか！」

俺のすこぶるツッコミが炸裂！

だって、しょうがないじゃん。

「ともだちマスク」の下にハットリ君のお面だぜ？

もう、20世紀ネタもマスクネタも勘弁してくれ。

「ふふ・・・」

・・・ん？

「うふふふっ」

ハットリ君が笑い出した。

「こんなに気持ちの良いものなんですね。ツッコまれるというのは。

」

そう言ってお面をとった。

「ごめんなさい。学園長にこれをつけていれば、面白いものを見れ

ると言われたので。」

俺は学園長をニラんだ。

くそ、笑いをこらえてやがる。

しかし、これまた偉くかわいい人が出てきたな。

桜色の髪にストレートロングで前髪をピンで止めている。

後頭部には大きな赤いリボンがある。

ニコリと笑っていて感じ良さげだ。

しかし、俺は知っている。

常時笑顔の奴ほど怖い奴はいない。

「私は 多田羅 笑咲 よろしくね。好きなものは 人の不幸かしら。」

ん？今、何やら人としてアウトな発言を聞いた気が・・・まあ、幻聴だろう。

「ちなみに、悪魔の実を食べるならメロメロの実かしらね。」

メロメロの実とは 相手をメロメロにし、石にする事が可能になる能力を得ることが出来る実のことだ。

「理由を聞いてもかまわないかね？」  
俺が問う。

「理由なんてないわ。ただ、私にかしづくものを全力で見下せるじゃない。」

ただ、笑っている。

まさか、こんな可愛い子が残念な感性をもっているとわ・・・恐ろしい子！

「そ、そうですか。」

たぶん今、笑顔が引きつっているだろう。

「大丈夫ですか？顔色が悪いですよ？」

「だ、大丈夫。すこぶる元気だよ。」

何考えているかわからん。

「これで、みんな終わったかな？」

と学園長。おい、待て。

「まだ俺がしてませんよ！」

と言つと

「あゝ、そうだった そうだった。このさっきからチョコチョコうるさいのが 轟 刹那君。女の子の悲痛な表情と悲鳴が大好きよ。

よろしくね。」

と学園長が言つと、みんな一斉に引いた。

「な、学園長！あることないこと言わないで下さい！みんな信じちゃってるじゃないですか！」



と俺は叫んだが

「本当に鬼畜だったなんて・・・」

「外道め！」

「怖いです。」

「・・・恐ろしい子。」

「女の子みたいな名前なのにね。」

・・・

「ま、待ってみんな、俺がそんな奴にみえるか？」

・・・

「見えるわ。」

「見えるな。」

「見えちゃいます。」

「・・・無論。」

「女の子みたいな名前ですものね。」

「・・・あれ？おかしいな。目が湿ってきたぞ。

しかも、最後の奴 明らかにワザとだろ。

俺が落ち込んでいると ポンポンと

学園長が肩を叩いて、うなずきやがった。

「あんたのせいだろうが！」

俺の嘆きが教室中に響いた。

「まあ、今のは冗談として。本当は女の子の手も握れないヘタレなチキン野郎です。仲良くしてやってね。」

学園長はそう言うと、俺に挨拶しると目で合図した。

「轟 刹那 です。なんていうか、よろしくお願いします！」

頭を下げた。

すると、拍手が聞こえてきた。

顔を上げる。

みんなが笑顔で拍手している。

俺の目がまた潤ってきた。

そして、

『女の子みたいな名前だね』

とみんなで一斉に声を合わせて言うてきやがった。

「女の子みたいな名前言うな!!」

なんなんだコイツ等は？

打ち合わせでもしていたのか？

俺の声が教室中に轟いた。

## 第8話 「RPGな世界へようこそ」

すさまじく疲れる自己紹介を終えると

俺たちは席に着く。

俺の席は窓際で温かい日差しが差している。

朝からバタバタしていたせいかわりに席に着くと眠気が襲う。

俺の隣に銀美女こと 星沢 ほしざわ 亜美 あみ。

星沢の隣に赤髪ポニーこと 駿河 すまが 茜 あかね。

俺の後ろに腹黒リボンこと 多田羅 たたら 笑咲 にこ。

多田羅の隣にウサ耳姫こと 姫乃 ひめの 恵流 えりゅう。

その隣にネコ耳娘こと 姫乃 ひめの 依夢 えむ。

このウサ耳とネコ耳は、双子の姉妹なんだそうだ。

まるで小さな塾の教室みたいな机の並びだ。

普通の教室の広さに机が6つしかないと

教室が妙に広く感じる。

「じゃあ、自己紹介が終わったところで この学園のことについて話しましょうか。おもに遅刻した誰かさんのために。」

と学園長。返す言葉がない。

「この私立聖魔璃亞学園、通称 魔璃学は、この世界の魔術師教育施設よ。」

・・・「はあ？」

何言ってるんこの人？

「あの何言ってるんですか？魔術師？どゆこと？」

まあ、当たり前前の反応だろう。

俺は周りを見渡す。みんな驚いていない。

「あゝ、そうか。少年は何も聞かされてないんだっけ。ということ  
は‘ムンド’の存在も知らないのね・・・」

ムンド？なんだそれはボンドの親戚か何か？

「ムンドって何ですか？」

俺が聞くと

「ムンドっていうのはね、この現世とは違うもう1つの世界のことよ。あなたたちの世界で言う、魔法世界みたいなものかしら。魔法世界って言っても怖くないし平和な世界よ。」

頭の中が？だらけだ。そんなアニメや漫画の中だけの世界を信じるとでも？

「ちよつと、お母さん。なんでコイツ ムンド 知らないの？」

星沢が俺を指さしながら言った。

「えつとね・・・亜美、落ち着いて聞いてね。少年は・・・魔王、かもしれないの。」

空気が凍った。

『ま、魔王！？』

俺を含めた6人が一斉に声を上げた。

ちよつと、待て。魔王？

俺がか？さつきから何言ってたんだこの人は？

俺は魔王よりも勇者の方が好きなんだよ。憧れてるんだよ。・・・ではなく！

魔術師だの、魔王だの。

とうとう、左脳が爆発でもしたのか？

「ま、魔王ってあの魔王？」

星沢さんが目を見開いている。

「ありえないわ。魔王の血族は、1000年前の戦争で途絶えたはずよ。」

何の話だ。戦争？

「そう。1000年前の戦争で途絶えたはずだった。けど、魔王の血を持った子孫は何とか生き延び、この現世で行き続けていたのよ。」

」

「あの、何の話をしているんですか？」

.....

「コイツが魔王？笑わせないですよ。こんな奴が魔王ならピッコロなんて大魔王じゃない。」

「いや、ピッコロは大魔王だよ！」

「そうね。ということでのこの変態が魔王なんてありえないわ。」

「どういふことだよ！てか、変態でもねーし！」

「でも、私も信じられないです。轟さんが魔王だなんて。」

とウサ耳姫。

「・・・私も・・・信じられない・・・」

続いてネコ耳娘。

「あたしも。」

「私もですわ。」

駿河も多田羅も異口同音のようだ。

「よし、分かった。それを証明しようじゃないの。」

そういうと学園長はポケットからアイフォンらしきものを取り出した。

「スペル・オン 証の剣。<sup>シノウ</sup>」

アイフォンに向かってそう言うと、急に光出しアイフォンの中から白い刀身の剣が出てきた。

「なっ！」

俺は驚きを隠せない。最近の携帯はこんなこともできるのか。

「これはアイフォンじゃありませんよ〜」  
と桂木先生かつらぎが言った。

「これは、アルタゴと言って現世とムンドをつなぐデバイスみたいなものです。これ自体が魔法陣の役割をなしていて 後は、改めてインストールしてある魔法陣に呪文を唱えるだけなんですよ。」  
よく分からんが、一々魔法陣を書かなくてもすむ画期的なものらしい。

冷静に整理できてしまう自分が恐ろしいが。

「じゃあ、どうやってそのアルタゴとやらから剣を出したんですか？」

「これはね、物質召喚アプリを使ったんです。あらかじめインストールしていた物を瞬時に出すことができるのです。」

「アルタゴができてから本当に楽になったわ。ひと昔前何て、紙とペンが必須アイテムだったもの。」

俺が想像していたより魔術師とやらはずいぶん現代的なようだ。すごいな。って、感心してる場合じゃない。

「え、え〜〜！マジでそんなことができるんですか！」

「今、目の前で見たじゃないの」

と学園長に冷静に返された。

「でっ、お母さん。その剣でどうするの。」

「亜美も魔法学校で最初にしたでしょう？適性検査。適性検査？何の？」

「それって魔王の適性も分かるの？」

「勇者の適性が分かるんなら魔王もできるでしょう。」

勇者？

「・・・そうかもね。私のことも分かったんですものね。」

・・・

「あの、さっきから言っている適性って何ですか。」

俺が口をはさむ。

「えっと、ムンドでは魔法学校に入ったらその人の魔法がどうい

系統に属しているかを見極める適性検査があるの。適性は基本的に5つあるわ。1つ目は、物理攻撃に特化し、戦士。2つ目は、回復魔術に特化した、白魔術師。3つ目は、攻撃魔術に特化した、黒魔術師。4つ目は、精霊を扱い回復魔術も攻撃魔術もある程度使える、賢者。そして、最後に聖剣を扱うことができ物理攻撃も回復魔術も攻撃魔術もできる、勇者。これらの適性によって自分の習うべき魔法系統が変わってくるの。」

ほろろ。なんかどつかのRPGみたいだ。

しかし、俺はまたもや1つの疑問に行き着く。

「さつき、星沢が自分のことも分かったって言ってましたよね？星沢は何の適性なんですか？」

「私？私は勇者の適性を持っているわ。後、私のことは亜美でいいわよ。紛らわしいから。」

「え〜〜。いやいや、それはないでしょう。こんな暴言吐きまくる勇者なんて・・・痛っ！いたたたたた！」

ヘッドロックを食らった。

「痛いです！痛いです勇者様！」

俺の頭蓋骨が変形しそうだが、放して欲しくない。

なぜならば！俺の左側の頭部に温かくとても柔らかいモノが当たっているからである！

「亜美そのくらいにしておきなさい。それ以上したら少年の頭がおかしくなってしまうわ。それに、亜美の立派なお胸が汚れるわよ。」

「きゃっ！」

亜美は、頬を赤らめるととっさにロックを解除しこつちを睨んだ。

「こ、この、変態！」

「ああ？変態？俺のどこが変態なんだよ！」

「鼻から血が出ているところだよ。」

「へ？」

ホントだ。鼻血だ。

「アレ？あゝそっか今日の朝にチョコレート大量に摂取したからな」  
今日の朝にそんなことをする余裕はなかったがな。

「2秒で分かる嘘はつかない方がいいわよ。アンタ朝、寝坊したでしょう。」

な、なんで知っている？

「アンタの頭、寝癖だらけよ。」  
ふ、不覚だった。

.....

「はあゝ、もういいわ。そんなに信じられないなら、。証明してあげるわよ。」

そういうとポケットから黄色いアルタゴを出した。

「リベラーション。」

何か呪文げなことを言うたちまち、アルタゴが光出し魔法陣が亜美の体を包んだ。

光が一閃した。

.....

眩しかったためつむった目を開ける。

.....!

そこにいたのは、鋼色の鎧に身を包み

赤いマントを纏い、頭にはティアアラがのっている。

胸の真ん中には黄色いクリスタルがある。

所々、露出している雪のような肌が妙に眩しい。

そう。そこにいたのは紛れもなく・・・勇者。

「な、何よ。あんまりジロジロ見ないでよ。恥ずかしいじゃない。」  
俺は口をポカンと開けていた。



な、何が起きたんだ？亜美が一瞬にしてコスプレしたぞ！

「今アンタ、コスプレとか思わなかった？」

「お、思っていない思っていない。」

やけに、鋭いじゃないの。

てか、よくアニメであるあれか？光が体を包んで変身的な。

ちくしょう！サングラス持っておけば良かった！

「どう？これで信じた？」

「信じるも何も、ただコスプレしただ・・ゲハッ！」  
殴られた。

「だから、コスプレじゃないって言うてるでしょう！これは聖装なの！これで普段は使えない強力な魔法や抑えている身体能力を解放できるのよ！」

「へ〜。正解みたいなも・・アベシっ！」

無言で殴られた。

「でも、やっぱり信じられん。なんか魔法使えねーの？火出したりとか。」

「そうね。じゃあ、見せてあげるわ。」

そう言うとアルタゴを構えた。

「スペル・オン 勇気の聖剣 サント・ヴァラー！」

すると、アルタゴから神々しい光とともに剣が現れた。

白銀の刀身に三つ又の切っ先。

柄は真つ白な羽でできている。

握りは黒く、一番下には金色の鎖が付いていた。

見た目はまさしく・・・聖剣。

「これ持ってみなさいよ。」

俺は言われた通り聖剣を握った・・・が

聖剣は俺の手の中からなくなっていた。感触もない。

「じゃあ、私に渡してみて。」

亜美が手を出してきたので俺は亜美の手の上で手を放した・・・すると

なくなっただはずの聖剣が亜美の手のひらに乗った。

「聖剣はね、勇者にしか触れることを許さないのよ。」

.....

「どう？今度こそ信じた？普通の人間なら一生見られない代物よ。感謝なさい。」

俺は、普通の人間のつもりなんだがな。

聖剣を持った亜美は勇者そのものだ。

「ああ、信じたよ。こんなもんが本当にあるなんてな・・・」

目の前で見てしまったのだ。信じるしかあるまい。

「じゃあ、一通り説明が終わったところで早速だけど少年の適性検査を始めるわよ。」

と学園長が仕切りなおした。

俺にもこんなことができる力があるというのか？

バカバカしい。そんなことがあるわけない・・・

でも、俺にもこんな力があったら・・・

やめとこう。期待するだけ無駄だ。

俺はごく普通の高校1年生なのだから。

## 第9話 「I am 魔王」

適性。

それは、魔術師にとつての1つの称号みたいなもの。適性は基本的に5つある。

「戦士」、「白魔術師」、「黒魔術師」、「賢者」、そして「勇者」。

しかし、俺が今から証明されるであろう適性は・・・「魔王」だ。ダメだって！パーティーに魔王を加える勇者がどこにいる？

結局、集団リンチでゲームオーバーなんだよ！

・・・コホンっ

失礼、取り乱してしまつたようだ。

というわけで、普通の人間であるはずの俺の適性を暴き出すというアイテムが

「証の剣」だ。

「証の剣」も1つの聖剣なんださうだ。

よつて、適性検査は神聖な儀式ということになる。

神聖な場所で行わなければならない。

そう学園長に言われた俺は、教室からみんなともに出た。

教室から少し行つたあたりに1つの部屋があつた。

たぶん特別室だろう。

扉には横文字の英語で何か書かれている。

「サクレド・ルーム？」

「バカ。シークレットルームよ。ルームくらい読めなさいよね。」

「轟はバカだな。あたしなんかシークレットさえ読めれば全部読めたぞ。」

亜美と駿河が冷かしてきた。

「バカバカ言うんじゃないやねーよ！俺はなサムライだから英語読めなく

ていいんだよ！ラストサムライなんだよ！駿河に至ってはルームしか読めてねーじゃねーか！」

そうだ！俺の人生に英語なんてノープロブレム！

「ふふっ……自分のことラストサムライですって。中二病 はなは 甚だしいですわ。」

「……苦笑。」

「ちよつと痛々しいです。」

続いて俺のラストサムライ発言に便乗して たたら 多田羅、ひめの 姫乃姉妹に冷かされた。

「なっ！」

何も言い返せない。

自分の言葉には責任を持つ。俺は心に誓った。

「アンタたち静かになさい。仮にも神聖な儀式を行う部屋の前なのよ。」

学園長に注意された。

こんなに真剣な学園長を見たことがない。

まあ、会ってまだ1時間と半分くらいだがな。

「ガチャッ。」

学園長がドアを開ける。

俺たちはドアの闇へ吸い込まれていった。

……暗い。

電気のスイッチはどこだ？

俺は手探りで壁にあるであろうスイッチを探す。

こっちなかな？俺は反対側の壁に手を伸ばす……

……ムニユムニユムニユムニユ……

何だこの柔らかい感触は？

ムニユムニユムニユ……

「ライト」

学園長の声が聞こえたと思った瞬間、視界が明るくなった。  
……っ殺気！

俺はさつきから手に伝わってくる感触が何か確かめるために自分の手の方を見る。

「はっ……ははっ。」

俺、死んだな。

俺のハンドは見事に亜美の胸をキャッチしている。

これ！このいけない手め！早くそれをお放しなさい。

ムニユムニユ……

「い、いつまで挿んでるのよ、この変態〜！」

殴られ蹴られを×2

「なんていうか……電気のスイッチを探していたら亜美の激怒スイッチを発見してしまいました。」

「うまくないわよ！」

「ほんつとすみませんでした！」

俺は亜美にボコボコにされた上に正座をさせられていた。

「ロクなことをしないラストサムライですね。こんなサムライ滅んだ方が世のため女子のためだとは思いませんか？」

「……同感。」

「轟さんは、女子の敵なのです！」

「腕の一本くらい折っていいんじゃないか？」

とんだ汚名だ。

「だ、だから今のは事故なんだって！不可抗力なるものだ！」  
全員ジト目で俺を凝視している。

殺される！視線によって殺されてしまう！

「もう！ホントいい加減にしなさいよアンタたち。ここは神聖な場所だっって言ってるでしょう。」

学園長にまた怒られた。

「だって、この変態が私の　む、胸を！」  
と亜美涙目ver。

「しょうがないでしょう。男はみんなオオカミなのよ。少年もラストサムライとは言え、結局・オオカミなの。」  
と学園長。

.....

「いや、やめてくれる！この残念な空気！ていうか、いつまでラストサムライ引きずってんの！」

「何よ、ラスト変態。爆発しなさいよ！」

「ば、爆発は酷くねっ！？しかも、ラスト変態ってなんだよ！」

「はいはい。漫才はいいから、もう準備できたわよ。少年、こっち来て。亜美たちはそこにいて。」

学園長のおかげで俺のセクハラ行為が帳消し・・・になりそうになり。  
い。

亜美がこっちを睨みっぱなしだ。

俺がセクハラ(?)をしてしまっていた間に準備を整えていたようだ。  
だ。

部屋の真ん中にはデッキカイ魔法陣が描かれている。  
魔法陣の周りには青い炎が浮いている。

ひ、人だま!?

「大丈夫ですよ。これは雰囲気をつけるためのものだから人だまじゃないですよ。熱くもないですよ。」

と保健のCKT(チビッ子ティーチャー)。

ホントだ。熱くない。てか、今　雰囲気とか言わなかった？

「少年。この手袋をして」

何やら分厚い手袋を渡された。

「これは？」

「その手袋しないと聖剣に触れられないから。」  
なるほど。

言われるままに手袋をした。

「じゃあ、これ持って魔法陣の中に入って。」

証の剣を差し出された。

「こんなんでどうするん・・・で・・・す・かつ！」

お、重い！

「ちよつと少年。気張りなさい。落としちゃダメだからね。」

「そ、そんなこと言ったって・・・」

お忘れじゃないだろうか。俺の基礎筋力が皆無であることを！

俺は何とか両手で持つと、魔法陣の真ん中に立った。

「始めるわよ。」

「は、は〜い。」

俺が返事すると静寂が訪れる・・・

「聖なる剣よ。汝の証をここに示せ。汝の光の道となれ。・・・プルーバ。」

学園長が詠唱をし終わると魔法陣が光りだした。

そして、「証の剣」の白い刀身が光出し

次の瞬間、光が弾け飛んだ。

・・・

目を開ける。

「な・ん・だと？」

白い刀身があつたはずのところは何もない。

正確に言うと

握りや柄はあるのに刀身だけがない。

どうということだ？

何もないということとは、俺には何の適性もないということなのか？

それはそれで、嬉しいような嬉しくないような。

「やっぱりね。」

学園長の声がした。

「やっぱりってどういうことですか？」

俺が問うと、少しの沈黙が訪れる・・・

「轟 刹那、あなたの適性は・・・『魔王』よ」

「・・・へ？」

「な、なぜですか？何も起こらなかったじゃないですか？」

「何も起こらなかったって、起こってるじゃない。」

起こった？何が？

「この証の剣はその人の魂と共鳴しあって適性を証明してくれるの。魂のことをムンドは魔力の単位として『アルマ』と呼んでいるわ。そのアルマの種類によってさまざまな形や色に刃が変わるの。例えば、『戦士』なら刀身が赤く燃える。『白魔術師』なら刀身が黄色く光る。『黒魔術師』なら黒い霧が刀身を包む。『賢者』なら刀身がグニャグニャに曲がる。そして、勇者なら刀身が真っ白な羽になる。という感じで刃が変化するのよ。」

俺のこの手にある証の剣は、今 説明されたどの反応にも該当して  
いない。

ただ、刀身が弾け飛んだだけ。

「じゃ、じゃあ、この反応は何なんですか？」

証の剣を見下ろす。

「・・・『魔王』の適性を示す刀身の反応は・・・」

学園長がそう言つと俺の手にある剣を指さした。

「刀身がぶっ壊れる。」

「なっ！」



刀身がぶっ壊れるだと？

そんなことがあり得るのか？

「この反応は何も、証の剣だからだけじゃない。・・・魔王は触れた聖剣をすべてぶっ壊すのよ。」

.....

「で、でも『勇気の聖剣』の時は何もなかったじゃないですか。」

「もともと、聖剣は勇者以外には触れることができないの。でも今、少年がしている手袋は特殊な加工がされていて聖剣に触れることができるわ。聖剣に触れることができなければ何も起きないのよ。だから、この儀式をするときはその手袋をつけなきゃいけない。」

「つまり、『勇気の聖剣』のときは剣に触れられなかったから何も起こらなかつたってことですか？」

「そゆこと。」

なんてこった。

マジで俺が『魔王』ということなのか。

「ムンドではその聖剣を破壊する魔王の力のことを『エスパダ・ロンプル』(聖剣壊し)と呼んでいるわ。」

「エスパダ・ロンプルですって？その忌まわしき力は、1000年前の戦争で魔王の血とともに途絶えたはずでしょう？」

亜美が驚きを隠せないように言う。

「さっきも言った通り、魔王の子孫はこの現世で生きていたのよ。・・・そして、今から20年前に1人の『魔王』がムンドに帰って来たわ。名前は・・・轟あきこ 武威むし・・・」

「轟？」

俺が眩く。

「そう。あなたの父親よ。」

俺の父親だと？

「魔王は子孫が途絶えると滅びる運命。魔王の適性はあなたのお父さんにも引き継がれていた。魔王の適性は代々引き継がれていくもの。だから、あなたのお父さんは、あなたにも託したはずよ・・・魔王の証を。」

俺の父親・・・っ！

「ぐっ！」

何かが・・・何かが頭の中を横切ったかと思うと激しい頭痛が俺を襲い、倒れこんだ。

「ちよつと！少年！どうしたの！少年！」

薄れゆく意識の中、みんなの心配そうな声が聞こえる。

・・・そして、俺はそのまま意識を失った。

## 第10話 「追憶の記憶」

これは、記憶の奥の記憶・・・  
俺がまだ小さかった頃の記憶。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ここはどこだ？

僕が目覚めるとそこには信じられない景色が広がっていた。

あたり一面が真っ赤に燃えていた。

心なしか頭がズキズキする。

頭を手で触れてみると血がベツトリついていた。

なんだこりゃ・・・

目の前には血の付いた蛍光灯の欠片がある。

僕はなんでここにいるんだっけ・・・

そうだ・・・今日は僕の誕生日だから

お母さんとデパートに誕生日プレゼントを買いに来たんだっけ。

それで迷子になっておもちゃコーナーで泣いていたら、急に爆発

音がして

天井から蛍光灯が落ちてきて・・・

お母さんはどうなったのだろう？

無事避難できたかな？

・・・

僕このまま死ぬのかな・・・

死んだら天国に行けるかな？

・・・

いやだ！死にたくない！

お母さん助けて！

僕は、声にならない声で泣き出した。

「おっ、何泣いてんだ？男ならどんなことがあっても簡単に泣くもんじゃないぜ。刹那<sup>せつな</sup>。」

炎の中から人影が近づいてくる。

やがて、炎の中からできたのは1人の男の人だった。

ボサボサな髪にくわえタバコ。

アゴには無精ひげ、小さなメガネをかけている。

黒いマントに身を包み、頭には赤いカウボーイハットをのせていた。

「ヒーロー見参ってか？・・・って、おいおいノーリアクションかよ。」

「アンタはアホですか？そのメガネは度が入っていないんですか？見れば分かるでしょう？大けがですよ。大けが。致命傷ですよ・・・そんなことを初対面で言えるわけもなくてか、今は声が出せないのです。僕はただその男を見つめていた。」

「おっ。！頭から血出てんじゃないか。カッコいいな。悟飯君みたいだぜ！」

おい。それが怪我人に向けて発する言葉か？

「というのは、冗談としてよく生きててくれた。ありがとう。すぐ助けてやっからな。」

そう言つと男は僕の近くにしゃがみ込んだ。

包帯を出し僕の頭に乱暴に巻きつけた。

「痛つ。」

「おつ、わりい、わりい。俺不器用だからよ。ちよつとだけ我慢してくれや。」

アンタが優しく巻く努力をしるよ。

痛みを我慢しながらそんなことを考えていた。

包帯を巻き終わると男は僕の顔をじつと見て

「立てるか？」

と聞いてきた。

僕は首を横に振る。

とてもじゃないが、立てる気がしない。

「そうか。」

「……………」

「なら、俺がオンブしてやるよ。」

僕は、激しく頭を横に振った。断固拒否。

「痛つ。」

「ほら、無理すんなつて。恥ずかしがることあねーよ。ガキは甘えるのが仕事だぜ。」

少し考えてから僕はうなずいた。

「おつ、その前に」

そう言つと男は僕の右手の甲に手を乗せた。

「<sup>つむ</sup>紡ぐは意志を 伝うは魂を 我が道を行かざるは <sup>おの</sup>己の正義の  
ために。 与えよ。 ……ポデル・デ・サタナス…」

そんなことを男が言つと

僕の右手の甲が光りだす。

そして英語の「S」をカッコ良くしたような文字が浮かび上がってきた。

「これがあれば、怪我なんてすぐ治る。コイツは俺からのバースデープレゼントだ。・・・誕生日おめでとう。刹那。」

そう言うと男は「ニツ」と笑い、僕をオンブした。

そして、炎の中を歩き出す。

不思議と熱くない。まるで、何かが守ってくれてるみたいだ。

・・・

男が言っていた通りだ。痛みがドンドン引いていく。

助かって安心したせいなのか、それとも男の背中が暖かいせいなのか・・・

僕はだんだん眠くなり、目を閉じた。

「おっ、よく聞いておけ。刹那。・・・復活の呪文は・・・」

\*\*\*\*\*

あの後、俺が目を覚めたのは病院のベット上だった。

俺が目を開けると母さんが泣きながら抱きついてきた。

母さんが言うには、あの爆発の後

俺はデパートの入り口で眠っていたのだそうだ。

どうやら、あのデパートに爆弾が仕掛けられていたらしくその犯人も捕まったということだった。

俺はあの男に助けられたことを母さんに言うと微笑んで

「よかったわね。きっとサンタさんが助けてくれたのよ。」  
と言っていた。

母よ。サンタはクリスマスに来るおっさんのことだ。  
残念ながらバスデーには来てくれないのだよ。  
確かに、赤い帽子をかぶっていたがな。

今思えば、あのサンタは  
なぜ俺の名前や誕生日を知っていたのだろうか。  
それに、あんなに大きな事件だったのに  
一切、テレビに放送されなかった。  
拳句の果てには、デパートは元通りになっていて  
あの事件がまるでなかったかのように人々の記憶から事件のこ  
とが消えていた。

あの頃の俺は病気がちだったから。そんなこと自体がどうでもよ  
くなっていた。  
だから、自然に俺の記憶からも消えていったのだろう。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3542z/>

---

魔王的な（後から決める）

2011年12月30日01時52分発行